

# 落語家 雷門小助六師匠 日本の伝統文化とこれからの松戸



松戸出身の期待の若き真打、落語家の雷門小助六師匠をお招きし会頭対談を行いました。江戸時代から続く老舗の高級呉服店の六代目として年を重ね、日本の歴史にも造詣の深い中山会頭と、小学生のころから古典落語に興味を持ち、平成25年に31歳の若さで真打に昇進した小助六師匠との対談は、着物や落語などの日本の伝統文化、水と緑の残る松戸のこれからについて話が弾みました。対談の舞台として、戸定邸が国の重要文化財に、庭園が国の名勝に指定されている戸定が丘歴史公園のご協力をいただきました。

## 好きこそもの上手なれ

会頭 小助六さんが落語家になつたきっかけはなんだったんですか。

小助六 子どものころ家でテレビを見て、落語をたまたまやってたんです。あたしの所属している落語芸術協会の前の前の副会長・春風亭柳昇師匠の落語をテレビで見ました。これ：会頭にヨイショしてみたいんですけど：（笑）、まず、着物がカッコいいと思つたんです。座布団に座ってお爺さんがしゃべって

はドツブリです。

会頭 ほう。中学の時から寄席などに行つてかなり落語を聞いていたわけですか。

小助六 中学のころは、そうでもなかったですけど、高校のころは月に1、2度は行っていました。

会頭 よく世間で言う「好きこそもの上手なれ」というやつですか。

小助六 いえ、「下手の横好き」とも言います（笑）。

会頭 いやいや、いいことです。仕事はなんでも大変ですが、好きになるとその人の能力が発揮される。収入の糧のためだけにやっているというのではダメですね。やっぱり、好きになつたほうが、心に響く仕事ができるんじゃないですか。

小助六 流石ですね。

会頭 うまいこと言うね（笑）。

小助六 自分で言っちゃ（笑）。

会頭もそうですか。家の仕事を継がれた訳ですよ。

会頭 わたしは「下手の横好き」

の方で商売になつたんですよ（笑）。

小助六 継がない、という選択肢はなかつたんですか。

会頭 なかつたですね。わたし六代目ですから。で、男は一人。あとは姉と妹ですから、継がざるを得ない、という気持ちがあるところからあつた。ですから、商人として育つたね。

小助六 その、人あたりの良さ、微笑みを絶やさない感じ、ですね。

会頭 微笑みは大事。でも信頼される微笑みと、からつ調子の微笑みというのがあつてね、真の信頼される微笑みを作るのはなかなか難しい。こちらは、作つて笑わせるんだから落語は大変ですよ。

小助六 どつちかという上辺ですよ（笑）。

会頭 まあとにかく、好きこそもの：というよりは、宿命として六代目ということです。歌舞伎の倅（せがれ）と同じですよ。

るだけなのに、面白くてカッコいい。もう亡くなりましたが、祖母がいつしよに見ていて、あたしが笑っていると「これ面白さが分かるの？」って聞いたんです。「面白い」と答えると、「頭がいいね」と言われたんですよ。あ、落語で笑うと頭がいいんだ、って思つて。それから、小学生の時はテレビで落語を見ていて、落語家になりたいと思うようになって、中学生になるともつとちゃんと落語を聞いてみたいと思ひまして、小遣いももらい、浅草などの寄席に行くようになって、もうそれから

小助六 ずいぶんいいところと例えましたね(笑)。じゃ、他にやりたいこととかなかったんですか。それこそ芸人になりたいとか。

会頭 芸人にはなりたくはなかったですけど(笑)、私は学者になりました。民俗学者。全国を歩いて、名所、旧跡、伝統、風土記の元になった話を研究するとか、そういうことが好きだった。でも、古典に親しもうという気持ちには着物にも共通するものがありましたから。

小助六 今でも何か研究されているのですか。

会頭 古事記ですね。副会頭の待山さんも古事記に興味を持って本を読まれてますけど、わたしは古事記を元にした地方地方の見解の相違というのがあります。それが面白くて見ているんです。邪馬台国でも、学者がいろんなことを議論してますが、マニアックな部分で個人で研究している人もたくさんいるんです。実際出雲の国の話はどうなのか、とかね。丹後は、播磨は、備後はどうだったのかとかね。海に囲まれた国だから、出入りする船はどんなだったのか、とかを研究するんです。

小助六 日本という国が出来始めたところのお話ですね。着物よりもずいぶん古い(笑)。

会頭 日本の着物なんていうのは、けっこう新しいんですよ。

小助六 着物はいつころから出

てきたんでしょうか。

会頭 今みたいな着方は江戸時代からです。室町以前はちよつと違うんです。戦国時代に変化があつて、江戸時代に落ち着いたんです。江戸260年の間にいろんな着物の文化ができました。(政治)改革が3回あつたでしょ。改革ごとに、町人が工夫してきている。それと、各大名が殖産興業のために、振興し、奨励した織物産地というのがいっぱいあるんです。

ところで、小助六さんが入門したところは苦勞したこともあつたんですか。

小助六 前座のころは毎日寄席で雑用係をしなくちゃならないんですよ。芸人誰に聞いてもその時代が一番辛かつたって言うと思います。ただ、あたしはなりたくてなりたくてしようがなくて(落語家に)なつたので、前座修行も楽しかつたですね。

会頭はいかがですか。

会頭 苦勞なんてないですね。でも、丁稚奉公には行つたことあるんですよ。青梅に3年間丁稚奉公に行つたんです。お客が大都市に取られてる都市。これは、松戸と似ているぞ、ということだね。松戸は東京に買い物に行っている所得層が多い。青梅も立川や新宿に行っているお客様が多かつた。そういう立地条件のところ、高級呉服をどうやって売っているのか、を見るための奉公でした。

小助六さんの子どもころはどうな感じだつたんですか。

小助六 生まれたのは市立病院ですけど、育ちは紙敷なので、子どもころ、こつち側(松戸駅周辺)は、あまり来たことがなかつたですね。今の東松戸駅あたりが山でしたから、あそこに秘密基地を作つたり、山を駆けずり回つて、ザリガニ釣りをしたりして遊んでました。落語が好きになつた小学生のころは、よくしゃべつて人を笑わせてましたけど、子どもらしい笑いではなくて、先生の

揚げ足を取つて笑わせようとか、先生に嫌われるタイプでした(笑)。中学になると、それこそ民俗学じゃないんですが、落語を研究する方にはまっちゃいまして。

この斬は誰が作つたとか、この師匠の弟子がこの人で、誰にこの斬を教わつてとか、そういうことを調べるのが好きになつちゃつたんです。高校はその延長線で、あまり活発にスポーツをするとかいう感じではなく、友達も落語が好きだという変わった感じの人でした。高校3年生の時に九代



雷門小助六 師匠

昭和57年1月19日生まれの33歳。松戸市出身で現在も市内に在住。市立松戸高校卒業。平成25年5月真打昇進。松戸市内でも松戸市社会福祉協議会、聖徳大学オープンアカデミー、松戸法人会等で公演実績多数。